March 10th 1910.

Report of the Sericultural Association of Japan.

No. 216

大日本蠶絲會報

臨時增刊第貳百拾六號

▲本號目次▼

●米國絹業談　農學士　紫藤章

●養蠶界の流行物　理學博士　佐々木忠次郎

●桑に就て　農學士　川島勝次郎

●農村と夏秋蠶　農學士　十時雄次郎

●製絲業の經營に就て　農學士　林驒作

●如何にして良種苗を世に供給すべきか　農學博士　稻垣乙丙

●蠶絲業の方針　學藝委員　土屋泰

●會務錄事＝明治四十二年度決算報告

●蠶桑雜觀＝大共進會と蠶絲館＝福岡支會發會式＝全國の風穴＝原蠶飼育の擴張

TOKYO.
The Association;
No. 18 Nishikicho Sanchome, Kanda, Japan.

東西蠶業講習所及に生絲檢査所の景

Les Stations séricicoles de Tokio et de Kyoto et le Conditionnement de la soie.

東京蠶業講習所

生絲檢査所

京都蠶業講習所

本誌は一年一回發行の年報であります

●本報の印刷部數は實に拾有餘萬に達して居ります

大日本蠶絲會の施設及事業の一般

●本會の目的　大會は本邦の國土民情に最も適應する蠶絲業の改善發達を圖り國力の增進を圖するをもつて目的とする

●本會の性質　本會は民法の規定に從ひ主務官廳の許可を得たる社團法人として此種團體中最初の設立なり

●本會の起源　本會は明治二十五年の創設にして實に十有九年の星霜を閱し歲月の推移と共に經驗の增進を遂みつゝあり

●本會の總裁　本會は、伏見宮貞愛親王殿下に眞誠して熱誠に推戴するの榮譽を荷ひし奉るに至れり

●本會の會員　本會の會員は、通常は一時拾圓又は四年間壹圓五拾錢、特別は一時拾圓又は四年間壹圓五拾錢、特別會員たる者は一時壹拾圓を納付せば會員たるの資格を具ふ

●會員の待遇　本會の會員に對し諸雜誌の割引かなし本支會の會合に際し諸費を待遇す

●地方の施設　本會は會員の多き地方に支會を設き少き地方に地方委員部を設け地方委員に支會及又は委員を囑託す

●婦人と蠶業　本會は蠶業の改良に婦人の力著大なるを認め各地に婦人部を設置し蠶業の發展と勉強の奬勵に努む

●學藝の調査　本會は蠶絲業上に於ける諸般の調査と會員の質疑に解答するの勞を執る爲三千有餘名の委員委員を置く

●通信の機關　本會は蠶絲業上の出來事を迅速に報道する爲外國及び內國各地に九千有餘名の通信委員を置く

●海外の聯絡　本會は蠶絲業上に於ける世界共通の公益を增進せんが爲米國伊國の聯盟團體に組織を通じ互に連絡を計る

●功績の表彰　本會は蠶絲業上に於ける功績顯著なる者に賞狀を贈呈して勸奬と爲す內外の名士三千七名

●販路の紹介　本會は蠶絲業に關する勞働者の二千年以上忠實に稼動せる者を選み賞狀を授與せる男女三百六拾名

●職工の慰勞　本會は蠶絲業に關する勞働者の二千年以上忠實に稼動せる者を選み賞狀を授與せる男女三百六拾名

●事情の疏通　本會は蠶絲業上に於ける技術設其他の得失を研究し政府機關會議業者の間に介在して事情の疏通を圖る

●說道の媒介　本會は時宜に應じて蠶絲說上に於ける品評會を開設し其出品の優劣を批判し以て相互聯絡の媒介をなす

●優賞の特典　本會は各地支會が開設せる品評會に對しても優賞に讓られたるものには　熱誠殿下より賞盃を贈る

●智識の普及　本會は蠶絲業の技術者學の紹介慰問會講習會の開設書籍の翻譯及講師の派遣を爲す

●扶植と利用　本會は會員に對し蠶絲業を扶植して利源を開發し、清國發行製絲の調査なし之が利用の途を講ぜんとす

●發行の會報　本會の會報は從來ゐ蠶ゐる三百　天覽の榮に浴し本邦に信用あるのみならず歐米の蠶業界に聲價を博す

●講義錄新刊　本會は蠶業教育の一助に資せんが爲の蠶絲錄外一種の學者に執筆を請ひ男、女別蠶業講義錄を刊行せり

●本報は一般會員の方には無代で配布するのであります

第五回總會に就て會員諸君に檄す

國富增進の聲を聞くや既に久しと雖も未だ其一斑の目的だに達し得ざるは國民として豈千歳の恨事ならずや要するに是れ各種生産業の發達遲々として振はざるもの即ち其眞因たらずんばあらず此秋に際して本邦の重要産業たる蠶絲業の改善發達を圖るが如きは實に急務中の急務なれば本會の責任亦重且大なりと謂ふ可し莫遮本會創立以降茲に十有九年の間社會の有らゆる風波と奮闘して一意專心斯業の爲に盡したりと雖も尙一段の奮闘努力を要するものあり故を以て本會は來三月二十七日を卜して第十回關西聯合共進會の開催地たる中京名古屋市縣會議事堂に於て第五回總會を開き斯業發展上の重要問題を審議し併せて功績表彰の式を擧行せんとす時や維れ靉靆たる煙霞融々たる春光を曇らせ空しく籠居するを許さゞるの候冀くば全國十有餘萬の會員諸君奮て杖を東海に曳き最も光輝ある本會總會の席に列せられんことを敢て檄す

明治四十三年三月十日

大日本蠶絲會

臨時增刊大日本蠶絲會報　第貳百拾六號

米國絹業談

學藝委員
農學士　紫藤章

米國絹業談に就ては先般來蠶絲會報に繼續して記載しつゝあるから詳細のことは其方に就て承知して貰ひたい。

茲には只米國の絹業狀態に就ての大略を述ぶるに止めやう。

偖、米國は人の知れる如く今や世界の絹業國と稱せられたる佛國を凌いで、其生絲の消費力に於ても實に世界の第一位に位する樣になつた、試に昨年米國に輸入せられた生絲の總數量を調査すれば實に、二千三百萬封度以上に達し世界全量の殆んど三割以上を占めて居る、其内で日本から輸入したものは千二百萬封度で全輸入額の五割以上を占めて居る、乃て日本から各國に輸出する數量と米國に行く數量とを比べて見れば、日本から各國に輸出する全體の六割乃至七割は米國に行つて、三割から四割迄が其他の國に行く割合である、右の如くであるからして米國は世界生絲の最大なる需要地であると同時に、又日本生絲の最大華客である、故に米國の絹業狀態を調査することは我國の蠶絲業に取つては最も興味あることであるし又、爲さねばならぬことゝ思はれる。

輸入絲の消長

抑も、米國に輸入する生絲生産地は何處かと尋ぬれば先づ日本を主とし、伊太利、支那、佛蘭西及ベンガル地方で之等各國の生絲が米國へ輸入する數量は、時に依り多少の相違はあるけれども、日本の生絲が常に最大數を占めて居る、伊太利絲之に次ぎ、其次ぎが支那絲であるが、近き數年來の輸入數量の消長を調べて見れば、日本の生絲は年々秩序的に其數量を增加し最近に至つては、輸入全數量の五割以上を占むるに至つた、支那絲は著しい增加を示さぬけれども近年に至り、殊に茲一兩年は殆んど前年來の格を破つて其輸入數量を激增した、又伊太利絲は其數量に於ては日本生絲の如く著しい增加を示さぬけれども、是亦支那絲の如く增加する傾向を來して居る、而して其品質概して優良なるを以て一般に歡迎

せらる。

過去の教訓……昔と今

今から四五十年前に在ては米國に輸入せる生絲は極めて僅少のもので、千八百七十五六年頃でさへ、本邦から同國に輸入せるものは百俵内外に過ぎざりしが、支那よりは其當時既に九千乃至一萬俵の輸入を爲しつゝあつたのである。其後日本生絲の輸入は著しく増加し、今日では桑支那生絲の位置を轉倒した姿となつた。是れ單意支那生絲の改良が遲々たる所に反し、本邦は其生産額の増加と共に著く改良行はれて需要者の嗜好に適するが故であると云はねばならぬ。誠に改良なる事柄は、今日前其効果を右左に教ゆることは過去の経驗いが、夫れが永遠に動かすべからざる教訓である。

が吾々に偉へつゝある。

夫れは兎に角、今日の米國の發達した組織の上から見て其原料生絲の需要は大したものである。從て現況より推論すれば全く日本の生絲が米國に輸入せる業は成り立つゝと云ふ形勢であるし、又將來其絹業が益々發達するは云ふに及ばぬ話しである。

米國の富は無限

元來絹織物は、其國の富の度に從つて増加するものである、處で米國の富は實に近來長足の進歩を爲し何程を増加しつゝある、今其一例を示せば千八百九十年の米國の富は六百五十億萬弗であつたものが、千九百年には八百八十億萬弗に上り、又千九百〇八年には一千二百五十億萬弗に上つて居る、夏に進んで人口一に對する富力を調査すれば

千八百八十年には……八百五十弗二十仙。
千八百九十年には……一千〇三十八弗五十七仙。
千九百年には……一千百六十四弗七十九仙。
千九百六年には……一千三百十八弗二十仙……に増

進して居る。

之を我國の人口一人の富力に比すれば實に大なる差である、殊に米國の面積は三百五十六萬七千五百方哩の面積あるが上に、林産は勿論の、水産に、其財源に富めること一度米國の地を踏んだ者の、嘆賞して措かぬ處である、而して其面積に比すれば人口は極めて稀薄であるから、今日迄に富源を開拓せられたものは、其一少部分に過ぎぬ次第である。

今年の人口調査に依れば、全人口は七千五百六十九萬人、即ち一方哩に二十九人の割合なる。

北部大西洋岸に於てすら一方哩百二十九人の割合なるに、南部中央諸州に在ては僅に三十八人、北部中央諸州に在ては三十四人、南部大西洋諸州に在ては百七十七人、西部大西洋諸州に在ては百七十七萬五千方哩に達する外、而も一方哩平均にすれば僅に二十八人に過ぎず。今全國の人口を一方哩平均にすれば人口英國の三百六十三人、伊太利の三百〇四人、佛國の百九十二人、獨逸の二百九十人、我國の三百二十二人に比すれば、其厚薄の差は實に甚だしい、而して米國の人口は、今や八千七百萬

除に達せるとも以て右に示せる事情は少今日では異なりては居るけれども、蓋し大差はないと見て差支なからう。

以上の狀況に依つて考ふれば、米國の將來は人口の増加と共に未開の地は次第に開拓せられ、生産品の價が増加することは疑なく、其前途の光明は洋々として海に春海も霞ならざる如きものがある。

生絲貿易の將來

既に述べたる如く、富力の増加に伴ふて衣食住の度も増進するものであるからして、此の點から推して考へれば將來に於る絹布の需要は如何程其力を有する國を、最大華客とする我國生絲貿易の將來は又前途多望なりと云はねばならぬ……左りながら世の進歩と共に世界に於る種々の出來事も増加つゝある者なるが故に、經過上に於ても終始變遷の如きも、時に或は其需要からざる數である、勿論のことであるが、仮令日の狀態に在ては其價格に於てこそ高低はあるものゝ、年々の需要數量に至つては増加の一方である。

つた當時に比べれば、信州上一番格百斤に就き六七十圓の差はあるものゝ輸出數量の上より見れば横濱港の米來だ曾て見ざる額に上つて居る、而して其價額は一億二千四百餘萬圓に達し本邦總輸出額の三割餘に當る、前年に比べて一千五百六十餘萬圓の増加である、昨年需要地に於ける絲價の低廉

現に昨年の如き價格の上に於ては之を二三年前の盛況であるとは、其價格に於ては、

なりし理由を探究すれば、其由て來る原因は一二に止まらざるべきも、經濟界の狀態と、一は繊物界に於る流行に支配されたのが、有力なる原因と見ねばならぬ。今は漸次順境に復しつゝあるが千九百〇七年米國に起れる内外の大恐慌は、非常のもので其影響が樂外に波及し、手間取れるに微しても、其復は仮令ば人間の大病なるが如く、而も其恐慌が激しかつた丈け今日に於ても尚恐慌を放棄する迄に至らなくて、警戒に警戒を加へて居る、從て繊物の如きは最も其實行が如何に多かつた、之に反し純絹物に於ては、絹交織物が非常に歓迎せらるゝに至つた、尚一方には安那作織織物が流行して全部作織に代して織るか或は作織を經糸に横糸に綿糸を用ゐたもの、又は作織を經に横に綿糸を用ゐたものなどが流行して米國生絲貿易上打撃を受けたものは多く綿糸の如きものであるが、加ふるに廣東絲が比較的絲質は粗雑であつても價が廉いので、著しく需要を増した爲に、日本の繰絲物たる上一番物又は廣絲生絲が打撃を受ける様になつたのである。

左りながら一方には如斯中等織物の流行が盛んになつた爲に繰絲用として伊太利、佛國西及上海の機械繰絲の如き、上等絲を使用するとは、其價格の高き爲に事情の許さざる點から、しして、其代用として日本の關西上番格のものが非常に多く需要せらるゝ傾向を來した、之即ち日本生絲中上一番

格と、準「エキストラ」格物との間に非常の直開きを生ずる原因となつたのである。

販路擴張の反證……油斷すな

偖て物の融通は不思議のもので、信州上一番格が米國に需要少なかりしかと思へば之れが歐洲へは亦常になく需要せらるゝ樣の現象を呈したが爲に、例年ならば米國と歐洲との輸出比例は七と三との割合であつたのが、歐洲への輸出比例が大分上つて來た、乃て自分が考へるには、昨年米國に流行した、絹綿交ぜ織又は其他の織物は曾々以て、生絲の需要を將來に增加する動機となるのである、何故なれば其織物が格安物であるからして、一般に普及さるゝ上に於ては極めて重寶である、現に昨年の如き生絲の直段は低廉であつた、けれども需要せられたる數量は增加して居るのは即ち其證據ではあるまいか、既に斯く廣く需要せられた以上は、絹綿交織に味を覺えた需要者は人間欲望の常勢として、他日純絹織物の欲望を惹起するに至るは疑いない。

聞く處に依れば「ニユーイングランド」地方に於ける、從來木綿織物の盛なる地方では、昨年は木綿機の機臺を利用して絹綿交織物を織つたと云ふが、更に本年に至つては新に千何百臺の機臺を增して盛に絹綿交織の業を起さんとしつゝありと云ふことである、既に木綿專門の機業家にして此の傾向を來たしたるは、畢竟下等織物の流行が生絲の販路を擴張したる事實を證據立つるものであると云はねばならぬ。

乍併茲に最も注意せねばならぬのは米國に於る支那絲の輸入增加である、兎に角支那廣東絲の如きは其質粗惡なりと雖も其價が廉いのであるから、今若し之れに少しの改良を加ふるに至つたならば其需要が增加するに至るは火を見るより明である、殊に米國機業家も其機業の發展と共に、原料の供給地を多方面に求めんとするは人情の常である、現に昨年一月頃米國絹業協會は其會の決議を以て、廣東生絲業者に其改良を促し、更に絹業協會が希望する樣改良せらるゝあらば之れに相當の報償を拂ふべきを以てした、左なきだに利を射るに敏き支那人は之が改良の實行に躊躇せぬだらうと思ふ……ダガ併し自分の考ふる處では、如何に改良を加へても廣東絲は其原料が多化性の繭であるから思ふ通りの絲は作り得られぬ、之に反して上海地方の絲に至つては大に趣きを異にして居る、若し夫れ上海地方の製絲家が充分の改良を加ふるに至らば、日本絲の蒙る打擊は測り知ることが出來ぬであらう、(故に現今米國市場に大なる優勢を占め居る日本生絲業者は益々奮て、此の際需要者の嗜好に適する樣にし既に占めたる今日の優勢を失墜せぬ樣注意せねばならぬ然らば如何にして嗜好に適する製絲を出さんか……夫れには宜く日本絲に對する批難の聲に聞かねばならぬ。

米國機業家の注文

米國機業家が日本の生絲に向ひ指摘せる缺點は種々あるが、其一二を擧ぐれば一、生絲纖度の不整なることとである、殊に同一格の生絲、若しくは同一商標の生絲に在つても、其品質の上に大なる差のあることは珍しくないと云ふことであ

る。例へば某商標の生絲を一度使用して其成績が良好であつたからと云ふて、再び其商標の絲を買ひ入れて使用して見れば、前に使用した時と同一の成績を見ることが出來なくつて非常の損をしたと云ふことを屢々耳にする。二、抱合の不堅固及細ムラのあること、之は機業家が非常に忌む處であつて、抱合の惡いのや細ムラのあるのは、肉眼では、一寸見出すことが出來ぬが、之を一度撚絲屋へ廻して撚絲を施さしむれば忽ち明になる、即ち撚絲屋では撚絲工程を施す以前に於て「ソーキング」と云ふて、石鹼、油、水の混合液に一度生絲を浸すのである、之は綛の枠角の固着を弛め、兼て綛全體に亙るゴム質を柔ぐる爲であるが、此の「ソーキング」を爲すに當つて抱合惡しき絲は、益々其抱合を惡しくし、爲めに一條の生絲は數縷に分れて、裂け絲の如き狀態を呈し、又は毛羽を生じて脆弱となる斯の如き生絲を再繰する時は屢々切斷する、屢々切斷すれば其切斷數が多い丈け、夫れ丈け、屑絲量を增し、精絲を減じ、勞力を增し、非常に生產費が嵩むことになるから、機業家の蒙る損害は些少でない、細ムラの多いことも亦同一の理由である、其他二本揚り多きこと、絡交の不完全なること等も、撚絲工程上に於る不利益の誘因を爲すのであるから、之等は當業者の深く注意すべきことであると考へる(此等日本生絲の缺點に就ては本會報に委しく記載する積りだから之を讀んでもらひたい)

又米國機業家は切りに、米國標準綛に據らんことを望んで居る、抑も標準綛とは從來本邦では十匁内外の綛二綛を以て一捻として居るが、之を二綛とせずして十八匁乃至二十匁を一綛として之を一捻とすることとて之は作業上の便利から其改良を望んで居るのである。

此の二綛を以て一捻とせるものと、二綛とせずに一度に單揚げとして一捻とせるものとでは賣買上に於て非常の差がある、現に或機場では二綛を一捻としたものより標準綛に準じて一綛を一捻としたものは絲質は一格上の品でも取引相場は一段下値で賣買せられて居る。

此の事に就ては自分等も我國の如く濕氣多き地では、其成績如何かと氣遣つて其實行に逡巡した次第であるが、昨春絹業協會長の「スキンナー」氏が來られて各地で其話しをした結果、之れに改めて輸出せられつゝある人も近年漸く增加したが今回之等の成績に就て調査して見たが、一向差支ないことを確めたのである、故に將來之等は改良せられんことを望むのである。

我國生絲の改良すべき點

尙絲質のことに就て少しく述べやう日本の生絲は到底歐洲絲又は支那上海蒸機絲に及ばぬ點がある、何故なれば一本經に適せぬこと即ち是なりである、抑も一本經とは、十五中乃至十七中若しくは夫れ以上の纖度の生絲を撚絲せずして、其まゝ經絲とし使用するのであるから、機業者に取つては非常の利益である、故に昨年の如き機業界が不振の年に在つては其一本經が非常に需要されたのである故に若し日本絲が一本經に適する樣になつたならば其需要は益々增加するであらう何故に本邦絲が一本經に適せぬかと云へば、即ち強力が不

足又は纖度不齊にして斑節あり、或は抱合不完全等の爲に速力の最も早い梭の摩擦に堪へずして切斷するからである。

然らば何故に強力其他に缺然があるかと云へば、是れは輕々に斷言することは出來ないが、蓋し、品質の異つた繭を混合して繰絲すること、若資の繭より繰絲すること、其他に依つて絲の抱合が最も完全に行はれぬのが一大原因を爲すであらうと思はれる。

全體北米にては歐洲生絲を豐潤なりと云ひ、信州生絲を軟質なりと云ひ、關西ものを硬質ものと云ふて居る、乃て將來一本經として最も望みを屬すべきものは軟質のものにあらずして硬質たる奥州物若くは關西の優等物ならんか奥州、若しくは關西地方の製絲家が、注意して一本經の絲を供給するには現在の繭質に於ても其繭選若くは繰絲上に注意を拂ふに於ては敢て不可能の事ではないだらうと思はれるから、大に試みられんことを望むのである、終りに臨み一言加へ度きは、品質上のことではないが、賣買上に就ての希望である、米國機業家の云ふのに、歐洲絲は多く先約定を以て賣買して居るが、日本の製絲家は先約定を忌む傾きがある、若し或る製絲家が一年中の製品の半額若しくは三分の一位を先約する事となれば、需要者に於ても生産者に於ても時に下落することあるも損失を蒙ることが少いから、歐洲生絲の樣に先約定で供給せらるる樣に希望して居ることである、是等は敢て實行するに難いことではない、却て業務を安全にするのであるから充分考慮せられんことを望むのである（此等の事に就ても本會報に充分記載する積りである）要するに日本生絲に對し米國絹業家の要求する處は先年來唱ふる處と大差はない、大差はないとしても數年間同一の小言を繰返さるゝのは、供給者と需用者との關係に於て甚だ遺憾の極みであるから、當業者の努力其實行に勉められんことを各位に望むのである。

其他御説明したいことは澤山あるが詳細は本會報に逐號掲載するから夫れに就て了知せられたい。(完)

養蠶界の流行物

學藝委員
理學博士　佐々木忠次郎

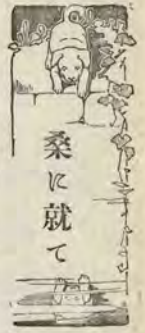
マダ改良の餘地がある

我邦の養蠶は維新以來大いに其面目を改め、育蠶家の増加も著しく從て養蠶の收穫も大いに昔日に勝れるやうになつた然れども今や一枚の蠶種から得るところの收繭高は如何にと云ふに昔日の收繭高と大差ないやうである、一枚の蠶種の收穫高は普通七八斗位であらうが若し、一石以上の高に達するやうになつたならば夫こそ養蠶の改良進歩を公言するに敢て憚らぬものと云はねばならぬ、然れども普通の收穫が一石以上に達することは未だ容易に公言することは出來ない、蓋し此域に達することが出來ない以上は未だ改良の餘地があるものと見做してもよからう。

如何なるものが流行したか

我邦の養蠶家なるものは何れも蠶業の改良に熱心であつて製絲家は亦其業に熱心であることは勿論政府に於ても明治七八年の頃より今日に至るまで養蠶製絲の兩業に大いに力を盡さるゝことは世人の認むるところである、其結果今や兩業の改善進歩を促したるもの尠なくないが、回顧すれば明治七八年の頃創めて歐洲の養蠶及製絲の方法我邦に輸入せられ、養蠶に在ては蠶病の恐るべきを了り、蠶室には空氣流通の必要を認め、製絲に在ては座繰を廢して歐洲式の製絲器械を使用するやうになつた、之れ維新後に於ける蠶業發達の端緒であらうと考へられる、明治十八九年頃より蠶病撲滅の聲高く、或は微粒子病を退治するには種紙を檢査し、精良無毒の蠶種を製造する爲めに檢蛾製種法を實行するに到り又軟化病、白殭病等の如きに至ては專ら亞硫酸瓦斯にて消毒するの説は盛んに我養蠶社會に於て、喧傳せられたのである、同二十八九年頃には各地に於て桑樹の萎縮病に罹れるもの續出するとて養蠶家間に大いに恐怖の念を生じ、專ら其萎縮病撲滅を絶喚するに到り、之に連絡して秋田造り桑園が世に歡迎せらるるの傾があつた。同卅一・二年より蠶病の消毒は養蠶上收獲を増進せしむるものとし特に蟻酸アルデヒット瓦斯及び「フオルマリン」液を最も有効なる無毒剤として使用するに至り、當時我養蠶界には消毒の流行は實に驚くべき程であつた其後蠶種一定と云ふことが流行して蠶種は赤熟、青熟、又昔、小石丸等の數種に限れるものとし、右の種類を專ら飼育するの傾向を來した、次いで桑の速成栽培法が東北の地方より流行し初めた、又秋蠶に就いて云はゞ明治二十四五年頃までは秋蠶を飼育するは桑園を荒蕪に歸せしめ、有害無益なりとの説は當局者の稱道せるにも拘らず養蠶家の秋蠶飼育高は次第に增進し、今や秋蠶は到るところ飼育せざるところなき程に發達するやうになつた。近年に到り蠶種の一定は遺傳の法則に據るに非ざれば其目的を達することは能はざるとの説が出て世人大に之に注目するやうな現象を顯した、左れば我が養蠶界に於ては時々刻々新規なる問題の簇出して、一時は其點にのみ留意し喧々傳するを常とするも其問題の解決如何を待たずして常に次の問題に轉走するの傾向あるを免れない、依て惟ふに從來各種の問題の續出するも其解決は未だ全からざるものの多いのを認むるやうに考へらるゝ、之等は皆其解決の完全を告ぐるに到るまで調査研究を繼續することの重大なることを認むるのである。蓋し其解決の全からざるは一枚の種紙より收むる蠶繭は未だ平均一石以上に達せざることの一事にても知らるゝのである、尚ほ養蠶界に生息する者は一時的の流行熱に侵され、百年の大計を誤ることのないやうにいたしたいのである。

▲大共進會と蠶絲館　愛知縣主催第十回府縣聯合共進會は愈三月十六日より向ふ九十日間名古屋市に於て開催せらるゝ事であるが、本年は同市の開府三百年に相當するといふので、市民は一層の熱心な様で、此壯大なる會をして最も光輝ある盛功にすらしめんとて努力し[illegible]であるが、此經費は凡て一百萬圓であるさうだ、而して會場は同市鶴舞町に在て總坪數九萬六千六百餘坪の内本館其他の坪數二萬二千餘坪であるが、此中には蠶絲館なる者が獨立して設けられてある、此館蠶絲に因みて生繭枠三個を合はした様な形状に造られ、内部を三階に分ち、第一階には蠶の一生を[illegible]蠶業の事、第二階には[illegible]、第三階には世界の[illegible]寫眞模型等の[illegible]に依りて示す計畫であるさうである。



桑に就て

學藝委員
農學士　川島勝次郎

誤れるの甚しきもの……

現今蠶絲業の進歩發達に伴ひ蠶體に關する生理病理、蠶の種類飼育の方法等各種の方面から研究調査せられ飼育法の改善に資したることが少くない、又桑樹に就ても種類の良否採苗栽植肥培除害の方法等考究せられ、多少實地に應用せられたるものもないではないが、併し當業者の意を用ふることは前者のやうではないが往々等閑に附せられたるやの感がある是れ何に由て然るか外ではない、桑樹の栽培は大部分肥料と勞力とに左右せらるゝから、獨特の技術を要することが少く容易に其改善の實を擧げ得らるゝに係はらず、一方に於ては或程度まで之を放任しても尚多少の効果を收め得べきものがあるからである故に動もすれば桑葉を濫收して省みず、其結果は延て其品質を劣惡ならしめ、遂に桑園を擧げて荒廢に歸せしむるに至るのである、此の如きは一に勞力の缺乏にも因るであらうが、肥料購入の爲めに一時に支出すべき經費に躊躇せる結果に外ならない、而して桑葉收穫の減少品質の劣惡は勿論飼育上に蠶種の製造に、或は繭質絲質に及ぼすべき影響等に就ては深く意に介せざる者が多い。誤れるの甚しきものといはねばならぬ。

今にして覺醒せなかつたならば……

近時桑園の增殖及改善の聲が漸く高く、或は桑園補助費を設けて之を下附し、或は直接に桑苗を配布し、又は當業者自ら進んで之れが增殖改善を勉めたる結果、逐年舊來の面目を改めたやうではあるが、肥培の點に於ては往々之と並行せぬものがある、勿論地方に由ては良田を使用し、寧ろ過多の肥料を投じ、果して收支相償ふべきや否やを疑はしむるものもあるけれども、此の如きは異例であつて多くは其量の過少なるに驚かねばならぬ、今にして覺醒せなかつたならば、僅に改善に向ひつゝある桑園も數年の後には一頓挫を來すであらうと思はなければならぬことである。

絹絲の大部分は蛋白質

夫れ桑は蠶兒の唯一食物であつて、其收穫の多きを望むべきは勿論同時に品質の優良なるを期せねばならぬ、蓋し桑葉の中には種々の成分があるが、就中最も重要なるものは蛋白質であつて約其六分の一は窒素である、絹絲は大部分蛋白質類似物であつて約一割三分は窒素から成つて居る、以て肥料中如何に窒素の必要であるかを知らるゝであらう、而して桑葉中蛋白質の多いのを望むならば自から他の必須養分をも施さねばならぬから肥培を懇ろにすれば桑葉は收穫の增收蛋白質の生成と共に他の成分をも十分に生成せらるゝやうになるであらう。

一として良桑を要せぬものはない

由是觀之桑と蠶兒との關係は極めて密接であるから假令養蠶家にして蠶室蠶具を完全にし、良好なる蠶種を掃立て飼育に注意したところが、桑の栽培に於て缺くる所があつたならば、一方に於ては收穫を減じ、貴重なる土地の利用を誤まるといふもので、他方に於ては良繭を收め得ないから其失ふ所が少くない、現今世間に重要視せらるゝ繭質統一問題の如きは大部分は蠶種の撰擇に由て決するであらうし又氣候の變化飼育の方法等にも關係する所が少くなからうが、桑葉品質の良否は其與る所頗る重大であるといふことを忘れてはならぬ、其他蠶種の製造の如き一として良桑を要せぬものはない、殊に近時夏秋蠶飼育の勃興に際し、一層栽桑に注意せなければ樹勢の衰弱は立ち所に至るであらう。

斯の如く桑樹栽培の改良は極めて必要であつて、各種の方面より其實行を努めなければならぬけれども、就中施肥は急務中の急務である、故に施肥に就て少しく述べてみやう。

肥料の種類と……其分量

肥料は其地方に於て最も得易く且廉價なる種類を撰ばねばならぬが多くの場合には堆肥に少量の濃厚肥料を混用するのが宜しい、元來桑樹は永年作物であるから、速効肥料を施すの要少く、唯兼用桑園に對しては速効肥料を用ゐるを可とする場合があると知らねばならぬ。

施肥の分量は桑樹の收穫量に則るのが宜しい、地方によりては一反歩に對し三十圓以上を使用するものもあるけれ共多くは四五圓を出でない、前者は寧ろ多きに過ぎ後者は稍足らざるの感がある、而して施肥の標準は桑葉中の三要素を調査し、其成分に準據すべきものであるけれども、窒素の如きは土壤中に於て約三分の一を消失するから、假に一反歩五百貫の刈桑を得るものとすれば、約六百五十貫に對する窒素と他の成分の相當量とを配合するこ

とが大切である、然れども桑樹は土壤の性質如何に由て限なく養分を吸收し得べきものではない、余が最近十ヶ年間試驗せし成績に徵してみると十文字を一反歩六百株の割に栽植し主として牛糞（敗藁を含む）及綉沙の堆積したるものを使用し、施肥の期節を春夏二期に分ち、春期には牛糞、夏期には綉沙を同分量づゝ與へ、甲區は通じて一反歩三百貫、乙區は同四百貫、丙區は同五百貫宛施し、三年目より施肥量を倍加し、四年目及五年目に收穫を調査したものは左の如くてある。

施肥量＼收穫量	新梢付葉量	古梢量	合計
甲區	二五三、一〇〇貫	一五二、一〇〇貫	四〇五、二〇〇貫
乙區	二五九、九〇〇	一六六、五〇〇	四二六、四〇〇
丙區	二九三、二〇〇	一九八、九〇〇	四九二、一〇〇

一反歩一千貫の施肥が最も經濟的

即ち施肥量多きものには比較的收穫量が多い、而して其當時使用せし肥料の價格と桑葉の價格とを對照すれば、尙多量を用ひて利益があるやうであつたから、果して幾許の程度まで施肥して桑樹に吸收せらるゝであらうか又經濟的に有利てあるかを知らうと思ふて、以後更に分量を同一程度に止めたるもの、及倍加せしもの等に就き試驗を繼續した處か、爾後三ヶ年は四百六七十貫より五百七八十貫の間を昇降し、翌年には六百貫乃至七百貫に垂んとするものあるやうになつた、然れども甲乙丙三者の間には殆ど差なく肥料少きものに於て却て收穫多きの奇觀を呈した、是れ即此の如く多量に施すも徒らに損失に歸し、該土壤に於ける該桑樹は最早此程度を越えて養分を吸收し得ざることを證明するものてある即最近四ヶ年間平均一ヶ年收穫量は左の如してある。

施肥量＼收穫量	新梢付葉量	古梢量	合計
六百貫區	二四〇、〇〇〇貫	二二一、七〇〇貫	四六一、七〇〇貫
千貫區	二五一、八〇〇	二四三、三〇〇	四九五、一〇〇
千二百貫區	二七九、六〇〇	二六一、六〇〇	五四一、二〇〇
千六百貫區	二八二、六〇〇	二五〇、八〇〇	五三三、四〇〇
二千貫區	三〇一、八〇〇	二五七、四〇〇	五五九、二〇〇

前記四ヶ年間に使用せし肥料價格と收穫したる桑葉價格との關係を調査するや、一反歩一千貫內外を施與せるもの最も經濟的であつて、六百貫及千六百貫以上を施せるものの如きは却て不利益てある、此結果は栽植の方法株數の多少肥料の時價及桑葉の價格に由て一槪に論ずることの出來ないのは勿論である。

如何なる桑園が圓滿に飼育の効果を收め難いか

同試驗に於て桑葉の品質は各區とも大差はない、是れ桑葉は或程度まで生育すれば滋養分の生成に妨げがないからである、けれども管理の十分でない桑園であつて植付後數年を經るも尙一反歩僅に刈桑百五十貫位に止まるもの、或は老樹を刈り込まざるものゝ如きは、其品質槪して劣惡であつて圓滿に飼育の効果を收め難いものがあつた。

之を要するに桑樹は其土壤に應じ、又は栽植の方法を異にするに從ひ、之を斟酌し、或程度までは十分に肥料を施す時は肥料價格に數倍する桑葉の增收を得らるゝものとして徒らに多量に施したところで決して吸收し盡すべきものではないけれども極めて豐饒にして表土深く排水佳良の地では能く一千貫以上を收穫し得べき實例があるから、肥料の吸收量も從て多いてあらう、宜しく機に臨みて之に應ぜなければならぬ。

平凡なる問題

以上は桑樹栽培上比較的行ひ易くして利益多き方法に就て述べたばかりである、之れと相待ちて耕耘害蟲の驅除其他の管理をも併せて行ふことゝすれば其得る所益々大きいであらう、苟くも養蠶家をして桑樹栽培改良の急務を覺かぬものはあるまい、而して之を實行せるものは甚だ少い、故に余は此平凡なる問題を提へて特に讀者の一考を煩はさうと思ふのである。

▲福岡支會發會式　福岡縣の蠶業家は大に斯業發展の旗を翻すには、強固なる團體の力に待たなければならぬとて、官民一致本會々員を募りて本會福岡支會を設置し、來四月九日其發會式を舉げ併せて本會九州大會をも開くといふので目下其準備中駐縣々々。

▲全國の風穴　現今蠶種貯藏風穴（露閑、冷藏庫等を含む）は東京外三十二府縣に亘り、其數二百四十四ヶ所に上り、此處に貯藏し得る蠶種は無慮千餘萬枚であるが、四十二年度の貯藏數は三百六十九萬四千八百二十三枚てあるさうだ

農村と夏秋蠶

五月蠅き農村問題

學藝委員 農學士　十時雄次郎

近時農村問題は、大變八ヶ間敷なりて、人每に口を開けば則ち、農村の改良、農村の經營、曰く何、曰く何と、殆んど吾人は、農村問題に聞き飽きたと云ふて差支ない、否、實際に於て、聞き飽きて居る、其聞き飽きて居る、吾人も常に農村問題を、口にしつゝある、あるのみならず、爲さゞるを得ないのである、其原因は、勿論種々ある、而して、其種々の方面に向て、農村改良の必要を感じて居る、併し、要は、農村をして、今日に於けるよりは、尙充分富裕ならしめんことを希ふにある。

農村の改良

農村をして、富裕ならしむるの法は、素より、一にして足らずと云ふも、無形的、即ち、形似下の改良は一にして、有

形的、即ち、形以上の改良は其一である、而して、此外には決して有り得べからざるのである、無形的改良に就ては、吾人、假令無識と雖ども、多大の希望を有し居る、實際遠慮なく云へば、現今の農村に於ける精神は、日に日に鷹飛しつゝある樣に感ぜられ、麻痺もし日毎に緩れば、日に日に新なりと稱せられるやも知れないが、乳子の所謂、日に日に新にして又日に新なりとの教訓は一歩一歩進かつゝあるのである、而して、此等の點に向て遺憾の念を生ぜざることはない、否、農村自身に於ても自覺する所なる、併し此等の點に向ては、他日充分吾人の意の存する所を世に問んとするが故に今は茲に多く喋せざることにしや、有形的改良の内には、技術の改良は常に當局者により唱導せられ、當業者に於て研究、且つ實行せられつゝあるが、農業組織の改良に至りては、漸次改良せられつゝありとするも、未だ吾人の意に滿たざるものが甚少なくない。

勞力の減少と副業

農業組織の改良にして、農村を富裕ならしめるは可成工、農業を集約にすることである、即ち一反歩の田畑より僅りに一年を通じて、七八十圓の粗收入を得るのが、例多くとされば、充分なる勞力を費して、百圓以上の粗收入を得る者の往々集約的農法を主張する所實に茲に基因するのである

而に於ては副業の益々發達して、勞力の分配を適當ならしめ勞働者の働人を少からしめんことを希望するものである。

農村の副業は夏秋蠶にあり

農家の副業の必要なるは、今更新らしく說くの愚なるを知る、必要あるが故に、其成績の如何は別として、各地共に大に奬勵せられつゝある、而して、吾人は其副業として最も有利なる、養蠶業にあるを確信して疑はないのである、故に養蠶業の農家の副業として、一般農村に充分普及せんことを願るものである、斯く言へば、或は世人評するに、養蠶業中にても殊に夏秋蠶の益々發達せんことを希望するものである、吾人は我田引水とせんも手ぬ難し、或田引水と言はゞ言へ、吾人は村の事情に通ぜざるに依る、之れ評者の愚にして、寧ろ吾人は評者を憫然に思ふに過ぎない、決して吾人は職を夏秋蠶部（東京蠶業講習所）に奪ずるの故に此說をなすのでない、既に述べたる如き農村の事情より、農村に對せんが爲のみ、夏秋蠶の發達は確かに農村をして富裕ならしむるの唯一の副業なりと云ふに躊躇せざるものである。

寧ろ秋蠶の發達を望む

夏秋蠶の發達は農村の副業として最も有利なるものであるが、就中、秋蠶を以て有利なるものとするのである、夏蠶業より排斥すべきは無い、併し、一般に普及せしむるものとして幾多の理由の存するにより、秋蠶の如く奬勵するの勇氣に於ては其生種と墨種の別を問はず、夏蠶に於ける如き失敗を見ることは、先づないと云つて宜からう、又夏蠶よりは秋蠶の方が他の農業即ち本業との繁閑の期も、巧に調和する如きことは極めて少なく、此等より見る時は秋蠶は夏蠶よりも幾層か度々思ふのである、又現に夏秋蠶は年々著しき進歩をなしてをるが、其進歩の狀況を見るも夏蠶より秋蠶に於て著しきものである、例へば明治三十一年の夏蠶收繭額は約三十萬石、同三十五年には、約三十六萬石、同四十年に於ては約四十七萬石であるのに、秋蠶に於ては、三十一年に於ては約二十二萬石、三十五年には約四十萬石、四十年には約七十五萬石の收繭額を、統計は示して居るではないか、夏蠶素より進歩しつゝありとするも、秋蠶の夫と比較せんか、夏蠶の進歩、實に驚くべきものがある、之れ農村に於て夏蠶を飼育するよりも秋蠶を飼育する利大なるものがあるに依る、之れ吾人の夏蠶よりも、秋蠶の盛大ならんことを願ひつゝ、實際と符合するところであつて、其理由を述ぶるの寧ろ迂遠なるを知るのである。

秋蠶は殊に農村に適ず

秋蠶に於ては其生種と墨種の別を問はず、夏蠶に於ける如き失敗を見ることは、先づないと云つて宜からう、又夏蠶よりは秋蠶の方が他の農業即ち本業との繁閑の期も、巧に調和する如きことは極めて少なく、此等より見る時は秋蠶は夏蠶よりも幾層か度々思ふのである、又現に夏秋蠶は年々著しき進歩をなしてをるが、其進歩の狀況を見るも夏蠶より秋蠶に於て著しきものである、例へば明治三十一年の夏蠶收繭額は約三十萬石、同三十五年には、約三十六萬石、同四十年に於ては約四十七萬石であるのに、秋蠶に於ては、三十一年に於ては約二十二萬石、三十五年には約四十萬石、四十年には約七十五萬石の收繭額を、統計は示して居るではないか、夏蠶素より進歩しつゝありとするも、秋蠶の夫と比較せんか、夏蠶の進歩、實に驚くべきものがある、之れ農村に於て夏蠶を飼育するよりも秋蠶を飼育する利大なるものがあるに依る、之れ吾人の夏蠶よりも、秋蠶の盛大ならんことを願ひつゝ、實際と符合するところであつて、其理由を述ぶるの寧ろ迂遠なるを知るのである。

既に述べたるが如く農村に於ては、技術の發達と共に漸次集約に赴きつゝある、從て多くの勞力を要するのであるが、勞力は年々欠乏を告げつゝある、故に、其組織改革の變化に待つことを要する、換言すれば、勞力の分配と云ふ事に就ては、最も考慮せねばならぬ、此點に於て、夏秋蠶の發達は必要である、九州や四國の如く、畑に於て三毛作とする集約農法は素より、吾人も亦大に贊成する所である、報酬漸減の法則も考へねばならぬ、假りに資金は充金ありとするも、勞力は一般に、充分用ゐらるゝものであるが、大に考へねばならぬ、吾人は農村に於ける勞力の年々減少つゝある樣に感ぜられ、農村に於ける勞力の減少を示して居るではないか、又實際地方に於ける勞力の減少を得ることに最も因縁を有して居るのではあるまいか、地方を巡回するに際し、往々良田の廢棄せられ、更に鳳凰の如くに、勞力、之を分ちとせざるものゝ多くを目撃するが、之等も確に、ばゝ決して斯る現象のあり得べきものではない、農村に於ける勞力の不足を證明して居るのではあるまいか、勞力の減少は、地方に於ては、漁業より、年々出稼の日數を延長して居るのである、熊本縣菜種地は此種の日雇減ぜし爲め大に衰頽し、昔日の面影をすら失せんとして居るのである、群馬縣利根地方に於ても、年々此日雇減少の爲め、養蠶家も大に困難を感じて居ると云ふのである、斯くの如く、種々の方面より觀ますれば、農村に於ける勞力の年々減少せることは、確に疑ひなかつたのである、而して、此外には、不足勝なる勞力を以て、果して充分なる集約農法を採用せらるゝ得べきや、蓋に疑問とせざるを得ない、故に吾人は、可成的集約農法の實現すべき現狀を見るは希望するの至である、或は難を得て蜀を望むの類に陥らんことを恐るゝのであるが、茲に於てか得られ、而して、一得べき勞力の範圍に於て集約農法の採用せられ、

製絲業の經營に就て

學藝委員
農學士　林　靜作

一昨年以來絲況不振の結果製絲業に大打撃を與へ、當業者の現況の好轉は實に想像以上である、夫れ昨年秋蠶期に於て繭價は倍々原料繭の仕入相場を高からしめ、格外の高値買入をなすに至らしめたが、新絲の出盛りにつれ絲況の不振は日一日より甚だしく、遂に信州上一番八百十圓と云ふ近來稀なる低値を表はすに至り、爾來一昇一落多少の波瀾はあつたが、要するに原料仕入當時の見込より幾に百圓以上の下値にあるのであるから、製絲業の損害は實に著しきものである、之が為近來各地に休業又は倒産等の報を耳にするのは實に嘆はしき次第で、又同情に堪へぬことである、製絲業が如斯不安定の地位にあつて往々世人より投機的事業と見做されて居らぬ結果ではあるまいか、爰を以て製絲業を安固の地位に確立し、其經營上の安定を期すると云ふことは、目下の救濟策として又將來の大計を圖るか上に於て極めて緊急のことであらうと考へらるゝから、聊か所は、多少忙しいが、二毛作として終る其他の地方に於ては國蠶の盛なる處は別として、夏季最も閑な頃である、此八月頃同育する秋蠶は、勞力の分配と云ふことに、最も適當して居るのである、而して風穴貯蔵の方法を合む）飼育上歩せば、此過勞は必ず節約すると云ふことなからんと思はれる、現に風穴貯蔵の効理なる今日に於ては、繭に於ては、繭くべき有様を示して居るのではないか、例へば風穴蔵に於ても、二十九年より四十二年に於ては、百二十七ケ所を増加し、貯蔵高は三十九年の約百萬枚より、四十二年に於て、十萬枚の三倍強を示して居る、此外生産に於ても、其生産額は年々増加しつゝあるのである、此等も秋蠶は農村の副業として適當せることを適せるものとする事が出來る、而して風穴種の如は又各方面に於て飼育するの仕方に於ては、最も協へるものであつて、生産よりも寧ろ餘れり一生産種と黒種の良否を云ふにあらず、則ち秋蠶の能盛は、風穴貯蔵と穴種の發生との関係を有するや明である、現に年に依り、風穴種の發生著しく不良なることあるを以て、製絲業者の逐次減ずるを見せしめ事は、再三見る處である、故に各地方に於て、昨年の如きは、其最も制敗を蒙のてあらう、當局者は、技術的の風穴研究と云ふのが、實に多かつた様である、併し其方法に關しては未だ遺憾と謂ふ所であつて、充分指導の任に適へるものゝないのは其原因である、之を一言に云へば一年間の歩調が常ならざることの二點で、是は他の工業とは非常に違へる事情があるのと、日本の今日不況此等も明に製絲業上一大困難とする所である。

何故に製絲業の經營は困難なるか

製絲の原料繭は之を一時に仕入ねばならぬ事情があるから繭の際非常の競爭が行はれ、其他繭の品位を充分に鑑別する暇なく、從つて精良品のみを選投するが難であるのみでなく、繭の價格を徒らにせり上げて勢ひ見通買をなし之が為めに大なる損害を蒙る、又原料繭が一時に輻輳するから自然其取扱が粗漏に流れ往々生繭が完全に行届かぬ為めに良繭の品位を損害は實に豫想以上である。

（乾繭取引は現在上に於ては殆んど行はれず、乾繭の際非常の競爭が行はれ其他繭の品位を充分に鑑別する暇なく、從つて精良品のみを選投するが難であるのみでなく、繭の價格を徒らにせり上げて勢ひ見通買をなし之が為めに大なる損害を蒙る、又原料繭が一時に輻輳するから自然其取扱が粗漏に流れ往々生繭が完全に行届かぬ為めに良繭の品位を損害は實に豫想以上である。）

次に原料繭を一時に購入せねばならぬから多額の流動資本を要する故に其金融策に困難するのみでなく、而も其利息は非常に多額に上るのである、其利息は長期の貸繭庫内に固定するから、為めに製絲家の此利息に対し且つ一方には工場設備の一般固定資本の利子及償却を負擔せねばならぬことであるから、餘程の奮發をせねばならぬ。

又原料繭を一時に購入せねばならぬから向う一年間の生繭の相場を豫想して原料繭の價格を定めねばならぬ、故に若し生繭の相場が先き上りの時には幸ひであるが、先き下りの時には非常の打撃を蒙るのである。

次に生繭の相場は實に其變動常ならず、而も價格に著しき懸隔を生ずることは他の密品には殆んど其類を見ることが出來ない、夫れは其生産の約三分の二は海外に輸出せられ、而かも日本の特産品であつて、外國の需用に俟つものである、之が為めに海外生産國の差額の程度、流行の狀態及び高の程度、其他當時の經濟界の狀態等により著しく絲價に變動を來す國の政策、外交、貨幣制度等により著しく絲價に變動を來すのである、是近代の例に於て上一番の相場が最高千四百圓に昇り最低八百圓に急激なる大變化を來し、其差六百圓以上に達したるが如きは實に驚くの外はない。

以上述べた通我製絲業は他の工業の如く、其時の相場に應じて隨時に原料を仕入れ、生産し、大同の原料代金を以て、大同の原料代金に流用すると云ふ様な譯けに行かぬから、勢ひ多額の資本を準備せねばならぬことゝ、絲價の變動多き為めに經濟の基礎が確固でないことゝ、此變動多き絲價に對し、向ふ一ケ年間の豫想をなして、原料を仕入れねばならぬ此三の點は實に製絲業を不安定の地位にあらしめるものである、世人より往々投機的事業と視せらるゝのも亦無理からぬ次第である。

皇見を披瀝して大方の叱正を乞はんとするのである。

現代に於ける製絲業の經營が何故に合理的でないかと云ふことは必ず先づ攻究せねばならぬことである、嘆みに其要領を述べんが為に左の點を一言に云へば一年間の歩調が常ならざることの二點で、是は他の工業とは非常に違へる事情があるのと、生繭相場の變動が常ならざることの二點で、是は他の工業には未だ其例を見ざることで、斯業經營上一大困難とする所である。

生産費に就ても競爭せねばならぬ

特殊原料中嗤、「生絲は漸次に實用的方面に需要の途が擴張せられ、今や繭の必要品として世界各個の人士に實用せらるゝ樣になり、隆々として消費高は年々非常の勢を以て增進しつゝあるが、併し尙一歩を進めて考ふるときは蠶絲は我國の特産物でない、世界の諸國に產出せられ、各國競ふて其生產に奬勵保護を加へて居る、殊に米國は工賃の點より到底其發達は見込みがないが、支那、印度、中央亞細亞等は今悔べからざる除地を存して居る、特に近來蠶絲が歐米各國に需要せらるゝと共だ多く、又獨逸に於て盛んに製造せらるゝ人造絹絲の需要が益々擴大せられつゝある如く制限增して百五六十萬圓に達し、人造絹絲も年々十五六萬圓の輸入を仰ぐやうになつた。是等類似品は其品位に於て又價値に於て到底純絹絲には遠く及ばざるのであるが、而かも其需要が增す所以は要するに價格の低廉なるに外ならないのであるから、我國の蠶絲業家は將來絲の良なる生產をなすと同時に生產費の低廉を期して生絲の需要範圍を相似絹絲に侵蝕せられないように努めねばならぬ、然り而して生產費を低廉ならしむる方法としては工場の管理、器械の利用、技術の改良等、有ゆる方面に攻究せねばならぬけれども、養蠶經濟の改良と計り除可良なる原料繭を得ると云ふことは非効果の最も大にして且つ著しきものであるから、此點に於て蠶業家の關係を密接なるに至らしむる方法として、繭買の改良を期する上に於ては是非共今日の製絲業の組織を變更せねばならぬことと思ふ、其方法として手短かに一例を擧げれば養蠶家を共同せしめて製絲業經營を各自の出資に例へべく、又管理者及技術者は專門の人に俟たねばならぬが、此方法によるときは原料に對して資本を要することが皆無であるのみでなく、絲價の變動によりて製絲家が蒙る打擊は全く無いので、製絲業をして今日所謂危險の位置より救ひ出し、實に安全確實なる工業となすことが出來るのである、且つ各自の生產繭を直接に製絲するのであるから、其利害得失も自ら明瞭で從て繭質の改良も充分に行はるゝのである。

養蠶業は製絲業と密接の連絡を取れ

以上述べた所より製絲業の經營が困難なる所以と現今に於ける經營上の急務とを披瀝した積りである、要するに今日の製絲業の組織は其基礎極めて不安定のものと云はねばならぬ即ち、原料資本、絲價、勞働、市價の變動等實に危險の程度が著しきものである、此點に於て害を除去し、且つ養蠶家との關係を密接なるに至らしむる方法として、繭買の改良を期する上に於ては是非共今日の製絲業の組織を變更せねばならぬことと思ふ、其方法として手短かに一例を擧げれば養蠶家を共同せしめて製絲業經營を各自の出資に例へべく、又管理者及技術者は專門の人に俟たねばならぬが、此方法によるときは原料に對して資本を要することが皆無であるのみでなく、絲價の變動によりて製絲家が蒙る打擊は全く無いので、製絲業をして今日所謂危險の位置より救ひ出し、實に安全確實なる工業となすことが出來るのである、且つ各自の生產繭を直接に製絲するのであるから、其利害得失も自ら明瞭で從て繭質の改良も充分に行はるゝのである。

產業組合法を活用せよ

以上の如き組織の製絲業は恰かも現行の產業組合法により生產販賣組合を組織するのが最も適切である、同法によるときは製絲業の危險が全く除去せられ、且繭の改良が期せらるゝと共に製絲業の發展が期せらるゝ、登錄稅の輕減、法人稅及營業稅の免除、又は五ヶ年以內定期間無限責任の組合に對して賃錢運賃の方法によりて無利子の資金の融通を受くる等法律上種々なる特典がある、殊に昨年以來聯合會を得るやうになつたから其組織を組織することを企てるやうになつたから其地方の地主人等の如何により數個の組合を組織して更に聯合會を設け、以て生產生絲の合同販賣をなすと云ふことは今日の米國機業組織に相應して一定多額の生絲を輸出するに最も適當なる者と云はねばならぬ、而して此方法が一般に普及せられたならば蠶業未開の地方にありては之れにより養蠶業を開拓し得べく蠶業先進の地方にありては養蠶業並に製絲業の基礎を安固ならしめ得べく本邦蠶絲業の健全なる發達を見るに到ることは疑いないのである。

繭質の改良

と云ふことは養蠶家に望むべきことで、又養蠶家は此れが終局の目的であるから、大に力を注かねばならぬと云ふことは必然の理であるが、此れは製絲家の側より改良を促し、又は奬勵を加へたが進み方が早い、即製絲家が故に善を加へて居る當然の價格を見て購入を能く鑒定して製絲經濟より打算せる當然の價格を見て購入することが肝要である、是れは勿論のことであるが、從來此計算が充分明かでない、一般に良繭が比較的高値で取引せらるゝ際に害があるが、如斯有樣で進んだならば、何時迄立つても繭質の改良と云ふことは期しらく製絲經濟の根本義と稱すべきものである。凡そ

工女の養成最も必要である

製絲業經營上に於ける今日の緊急問題は獨り繭質改良に止まらず工女の養成をなすと云ふことである、製絲業は他の工業に比すれば器械を利用すること少くして主として工女の手工によるものであるから、技術の練磨は申すに及ばず其精神作用が業務の上に著しく發現するが故に特別なる工女教育を施して精神的修養を行ひ業務に忠實ならしむることは生絲の品位を優良ならしむると同時に生產費を減ずるの唯一の方法である。

如何にして良種苗を世に供給すべきか

（種苗研究所の設立に就て）

學藝委員 農學博士 稻垣乙丙

先づ其原因と事情とを研究せねばならぬ

種苗は植物生產の本源であるから種苗の改良が植物生產業上の最大要務であることは今更喋々の辯を費すまでもないことであるが現今我種苗界の狀況は如何であらうか、これ予輩の言を俟たずして世人の多くが熟知する所であらうと思ふ。予は嘗て此事に就て大日本農會に演說して一の希望を陳べたことがある（明治三十九年八月發行の大日本農會々報第三百二にあり、其當時林學博士白澤保美氏も亦同樣なる希望の下に『種苗商の合同を望む』といふ一論文を出されたことがある（農業世界紙上にあり）予輩は實に精良なる種苗が廣く世に頒たれないで反て不純正の種苗或は發芽の力なき古種子の類が徒らに多く轉々輸送せらるゝの狀況を慨して之が革新を希ふものである。予輩は學術の研究其歩を進むるも實際の施行が之に伴はなければ遂に改良に益なきことを嘆ずるものである顧ふにこは啻に予輩僅數者の希望たるに止らないで廣く農業者、林業者園藝者及び牧畜者の希望する所のものであらう。此に於てか或は又種苗檢査所を設立すべしとの建議となり、或は又種苗取締法制定の要求となり、幾多の人士が此事に向て注ぎたるの熱血は蓋し尠くないのである。然かも今日に至るも尚未だ一の種苗檢査所の設立だも出來ず、又種苗取締法の發布だもない。而して又一方に於ては誠意に良種苗を世に頒たうとする種苗商の大合同も出來ない。たま〳〵誠意を以て事に從はうとするものがあつても或は中途で倒れ、或は大に其發展を現はさずに終るのである。これは果して何の爲であらうか、予輩は先づ此點に就て其原因と事情とを究めなければならぬ。

種苗研究所設立の趣旨は係りて此一點に存する

農政の局に當るものも亦種苗取締の必要を感じて一たびは予輩にも諮られたことがある。然かも遂に檢査所又は取締法の設定に至らない。之を質問すれば乃ち曰く、種苗取締は誠に必要であるが之を十分に取締るが爲には充分なる學術上の根據を有たねばならぬが今日種苗に就ての學術は尚未だ十分に其處に達せぬではないかと。然り今日の學術は固より決して其蘊奥には達して居らぬ、種苗を取締るに於て或方面に於ては尚遺憾の點がないではない。然し徒に完璧を望んだらば何れの日にかよく瓦石を除くことが出來やう。今日學術上の研究尚未だ盡さゞる所があつても歐洲に於ては夙に幾多の檢査所あつて、着々取締の效を收め、之に依て良種苗は世に供給せられつゝあるのである。其既に學術上に根據のあるもので之を取締つたならば取締の出來ないといふことを憂ふるに及ばぬことである。其の不十分であるとするの點は予輩も亦其不十分であることを認めて常に之が研究を希圖して怠らぬものである。前年近藤農學士の研究の成績の如きは、（載せて農學會々報上にあり）此缺陷に向て幾分の塡補を試みたるものであるではないか但方今其研究機關は不備であるから之が研究も亦其歩を進むるに於て遺憾多大であると云はねばならぬ。予輩が今茲に特に種苗研究所を設立するの主意は亦多く此點に係りて存するのである。

種苗の正價如何に就ても研究するの必要がある

頃日農學士磯見八太郎氏は東都に於ての販賣種子に就て仔細に調査せられて長篇の報告を出された、予は乃ち此報告を（[illegible]）に紹介して其農業雜誌に掲げしめたるに（該雜誌一千七十四號より以下九冊に渉りて連載あり）該雜誌記者は其論文の初めに米人某の言であるとて序文的に緒言して云つた。曰く『種苗商は農家が買はんと欲する品質の商品を供給す、農家にして純正の種子を得んことを主張し、而して之に相當する價を拂ふことを欲せば多數の種子商は喜んで純正の種子を取扱ふべし、去れど如何せん農家の多數は善良なる種子に向て高價を拂ふことを欲せず、彼等は廉價の種子を要求す。而して廉價なる種子は兎角粗惡たり易し、されば粗惡種子に對する責任は種子の供給者の負ふべきと同時に、需要者も亦之を分たざる可らず』と。

嗚呼販賣種苗の不良なるは一面農家が徒に廉價なる種苗を要求するの罪であると云ふか、種苗の正價は購買者たる農家は多くは之を計知することが出來なくて、販賣者の定價表を見て初めて之を知るのを通例として居る、種苗の價を其正當の價格より落して、猥りに廉價を標榜し、而して不良粗惡の種苗を供給して以て得々たるものは之を種苗商以外の罪であるとするか、予輩は現今種苗界の弊は一面大に此の正價を亂したるにあることを思ふものである、予輩は此に於てかまた種苗の正價如何に就ても研究するの必要を見るのである。

種苗研究所の設立と岩崎男爵の同情

予輩が種苗の研究及改良に意を注いだのは一朝一夕のことではない。而して特別なる機關の之に對して起らんことを望んで居ることは久しいことである。しかも今日までは專ら國立研究所檢査所の設立のみを希望したのである。否今後と雖ども亦た同一の希望を有するものである。然かも今日までの狀況によれば國立の希望は何日に於て其目的を遂し得るやを期することの出來ない。此の狀勢は予輩をしてゝに白澤博士及び其他の同志者と計つて一の研究所設立を畫するに至らしめたのである。幸にして此計畫は頗る多く同志者の賛

助を得た。殊に岩崎男爵は大いに此業を壯なりとして同情を寄せられ厚意を以て其庭園内の温室作業場の一部を予輩の使用に供せらるゝに至りて評議は乃ち實現の運に向ふことを得た。予輩は乃ち尚未だ不完の點あるを思ふに係らず敢てこゝに一の種苗研究所を設立して今後の發展を期するものである。

今より何を研究すべきか

予輩は今より如何にせばよく精良の種苗を世に處めうるであらうかと研究したいと思ふのである。又如何にせばよく種苗の取締をなし得るであらうかに就て研究したいと思ふのである。品種の正不正は如何にして之を鑒定すべきかを研究するのである。種子の生氣を長く保たしむるには如何にすべきかを研究するのである。種苗の發育を佳良ならしむるには如何にすべきかを研究するのである。現今世に在つての研究に就て其形質の研究に從ひ、更に之を改良するにも從はんとするのである。新たなる良品種の作出にも力を致さうとするのである。各地に適應すると否とを研究して夫々適所を得しめんとするのである。其他一切種苗に關しての科學的、技術的及經濟的研究にも從はうとするのである。但此等多數なる研究の事項に就て其成績を挙げやうとするのである。研究の事項に就て其成績を挙げやうとすれば幾多の材料と幾多の研究者とを要し設備費用とも大なるのである。世間大方の援護と賛助とを得なければ固より十分の功績を挙げうるものではない。予輩はこゝに世に訴へて同盛諸氏の賛成を求めたいのである。希くは或は研究の資料を供し、或は研究に便宜を與へ、以て上、進の目的を遂げしめられたい。

善助と共にまた利用するところあれ

けれども予輩の事業は固より公益を目的とするものである、徒らに世に授護のみを之求めやうと思ふのではない。予輩は、交互相益を以て處世の主義とする所である。研究一歩を進むれば實行亦一歩を進むべしと主張するものである。既に成し得る所のものは著實に行し、以て世に公表せんことを希ふものである故に研究に伴ひてはまた檢査のことをも實行して以て世の良種苗を得んとするものである。予輩は研究と計畫とを計らうとして以て山來得べき範圍に於て種苗の需要者の依賴に應ぜやうと思ふのである。推ふにこれ世に需要する所以であつて而してまた大に研究にも資する所のある所以であらう。此文を讀むもの幸に予輩の主義を賛して援護賛助する所あり、又利用する所あられたいのである。

▲原蚕飼育の擴張　群馬縣蠶業組合聯合會は去月十八日の總會で鹿賀氏の問題に就き種々議論し右結果原蚕飼育は從來の規模を超に擴張し、明年度よりは各村別に多數蚕場を設置し、製種中出殺繭其他に就き研究し、更に絲綿試驗を行ふて其成績優秀のものに選拔して、勢めて同種の普及に關り適當の處置法を設て極力勧奨することにしたさうである尚蚕業は各郡毎に蚕紙標準を定め其種目を明瞭にし御賛し、原蚕飼育は明年度迄十七ヶ所の處明希望者には之を飼育委託するの方法なも設ることにしたさうである、殊更に適した處方。

蠶絲業者の方針

學藝委員　土屋泰

油斷も際もならぬ世の中

吾邦生絲の生産額は、近年急増殖して世界の四大蠶絲國中で第二位にまで進みたることは、誠に喜ぶべきことである、併し事業が盛になれば、隨て種々の弊害も亦多くなるから、之に對する除害の設備も亦完成するを必要とするは勿論、蠶絲業を國家唯一の富源と一家經濟の主脳とするに足りたる今日は當業者も往昔と異りて、堅固なる決心を以て確實に永久的に經營せなければならぬ、一國の富源と頼み、一家經濟の主脳と頼む生産業が、經濟界に小波瀾のある度毎に、動搖する樣な(始末)では、其だ心細いことである、狂奔して桑園を設け、復少々下落したからとて、青息吐息で折角栽付けた桑を抜き去る樣な、所謂薄志弱行では、桑生存競爭の劇場、其なる世界の生産業界に立ちて、優勝者となることは出來ぬ、故に生産業者は、農業と云はず工業と云はず、世界の同業者と對手とする者は、其國の樣なるべき大方針を定め、此方針に從ふて勇往邁進して、自己の地盤を確實に占領せなければならぬ、現時の生産業者は何業でも、世界の同業者と對陣して、毎日戰闘しつゝあるのである、此戰爭に敗を取れば、ドシ〳〵城下へ侵入せられて横暴を極めらるゝのである、一二の實例を擧げて見れば、吾邦の棉作の如き、亞米利加や印度産の棉と戰ふて敗へて、失敗して、遂に米利加や印度産の棉や羊毛や蘭領産の藍や獨逸産の化學染料に、戰を挑まれて、吾邦の藍作は印度産の藍や獨逸産の藍に壓倒されたのである、是亦慘の最期を遂げたのではあるまいか、觀作たる米は如何と云ふに、先年來蘭領米や西貢米と戰ふて敗へて、是亦米利加産の小麥と苦戰中ではないか、若し此戰爭に負けたら藍作や棉作と同一の運命に終りはせぬか、嘗て觀じ來れば油斷も際もならぬ世の中である。

所謂蠶絲業者の方針

處で吾邦の富源と頼み又一家經濟の主脳と頼む蠶絲業は如何にと云ふに、斯の業は器械の力と膽力とを用ふる區域が狹しと主に手先の仕事であるか爲に、手先の器用にして膽力の慶なる我蠶絲業者は有利なる地位に立ち、先づ佛蘭西(伊太利)の同業者と戰ふて、對手に多大の損害を與へ、見事に勝利を得たのである、其結果敵は益窮境に陥り、我は年々歲々息々として產額を增殖したのであります、然れ共未だ彼等を品位精良と云ふ武器を以て我が防禦陣内に體りて死守して居る、我當業者は未だ之を包圍陥落せしむるに至らず、故に將來武器を改良して、更に實實を試むる覺悟を要するのである。

然るに我敵は伊太利佛蘭西のみてはない、隣に支那と云ふ强大なる敵がある、廣い土地と衆い國民と廉い勞力とを以て今や徐々と軍旅を整へて進軍しつゝある。我蠶絲業者は、此大敵軍に對して如何なる作戰計畫を爲しつゝあるか、果して此大敵に對して歷々勝算があるか隣の敵は歐洲の夫れよりも一層手答へがある、吾々は此强敵に對陣して、作戰計畫を如何にすべき、武器は如何なるものを擇ぶべきか、是吾輩が蠶絲業者に聞はんと欲する要件であつて、所謂蠶絲業者の方針と云ふのが是てある。

支那の蠶絲業に對する策戰計畫は如何にすべきか

惟ふに吾蠶絲業者が支那の同業者と對戰するに就て採るべき策は大體二ツあるのみてある、即ち生絲の品質を改善して優等絲の生產國となり世界の機業界に於ける經絲と云ふ陣地を占領し、支那蠶絲の侵入を許さゞること其第一策てある、生絲の品質と云ふことは第二として、專ら格安の生絲を造り廉價を唯一の武器として對戰すること其第二策てある、第一策を積極的方針と云ふならば、第二策は消極的方針てある。右二策の中て孰れを採るが將來の爲め得策てあらうか、此處大に講究を要する大切なる點てある、此作戰計畫が定められたならば、此大方針に依りて、全國の當業者は一齊に步調を整へて、猛進するより外はない、此場合に於て全軍の意志が一致せず、躊躇逡巡する者かあつたならば、縱令百萬の大軍ても勝利は覺束ないのてある。

今以上の二策に就き計算上から其得失を考ふるに優等生絲を造るには優等の繭を原料とし製絲工費も並絲よりも多く要するは勿論てある、故に養蠶家も製絲家も、生產費は今日より以上に多く掛ることを覺悟せねばならぬ、併し相場も優等物は高く賣れ行くから、收支差引しての利益はなければならぬ、又並絲を造れば、原料繭も麁末でも間に合ふ、製絲工費も少いからして廉價に賣ることは出來るが、並物は相場が低いから、收支差引して得る處の利益は、前者と大差はなからう、否二三年以來の絲況では、優等絲を造るものに利益が多くなつて居る、然れ共計算上から觀たる兩者の利害は、假りに同等と見做し更に商略上から觀たる得失は如何てあらうか。

元來支那は地價も勞力も吾邦に比すれば甚だ廉てある、故に格安物を造り値段て競爭するは、彼等の最も得意とする所てあつて、我の不利なるは云ふまでもない、弱音を出す譯てはないが此競爭では到底我に勝算はないと思ふ、そこて私は第一策を採りて我邦では優等絲を造りて、進んでは伊佛の蠶絲業に當り退いては支那の同業者に備へ、歐米機業界の經絲を我が一手に引き受ける事に致したい、斯くするには養蠶家も今日以後一層優等繭を收穫する工風を必要とし、製絲家も亦一層優等絲を造ることを講究せねばならぬ。

世界絹絲市場の大勢から見ても策の上々なるもの

以上述べたる積極的方針は、啻に支那蠶絲業に對する作戰上の上策なるのみならず、世界絹絲市場の大勢に鑑みて、我邦の當業者が採るべき策の上々なるものと思ふ、何となれば歐米の機業者は、將來我優等絲を希望する傾向がある、是は單に上等の織物を造る爲め斗りではない、上等織物を廉く仕上げる爲めてある、廉い織物を造るには、廉い粗末の絲ではならぬ、價は少し高くとも、優等の原料でなければ、器械を充分に働かせることが出來ぬ、原料が粗末で時々切斷して器械の運轉を止める樣ては、仕事の出來高が少く織賃が高く附くから甚だ不經濟てある、而して今後機業は益〻器械力に依ることが多くなるのは當然てある、隨つて原料絲の精選を要求することも、亦益〻急且切なるは當然の話てある。

積極的方針を取るのが最後の勝利

前陳の次第てあるから、支那蠶絲業に對する作戰上から見ても又世界機業界の大勢から考へても、我邦の蠶絲業者の將來採るべき方針は所謂積極的でなければならぬ、品位の改善を犧牲に供して、姑息的に生產費の減少を圖るよりも、多少の生產費は向上しても、須らく忍んで奮鬪し終局の目的を達することに努むるが上策と信するのてある、全國の當業者が一致共同して此方針て猛進すれば、世界蠶絲業の覇權を我に收め、我邦富源と賴む生產業の基礎を一層安固ならしむることは、敢て難事ではないと思ひます。

會務録事

明治四十二年度經常部決算

科目	金額
總收入	金六萬七千四百貳拾七圓五拾四錢
內譯	
會費	金四萬六千八百六拾八圓八錢
會報代及廣告料	金壹萬七千貳百八拾七圓七拾九錢五厘
[illegible]	金壹千貳百[illegible]拾壹圓六拾六錢五厘
內	金九百六拾七圓四拾七錢五厘
	金六拾圓九拾錢
	金七拾圓貳拾九錢
	金貳百參拾四圓
[illegible]	金貳千圓
總支出	金六萬七千四百貳拾七圓五拾四錢
內譯	
事業費	金壹萬五千百七拾六圓拾參錢壹厘
內	金壹萬壹千七百四拾八圓六拾壹錢六厘
	金壹千貳百七拾壹圓參拾八錢五厘
	金貳千六拾六圓參拾四錢
	金百參拾九圓七拾九錢
俸給及諸給	金六千五百九圓貳拾九錢五厘
內	金五千參百七拾八圓六錢
	金七百四拾七圓七拾貳錢
	金參百八拾參圓五拾壹錢五厘
[illegible]	金貳千四百四拾七圓八拾四錢
[illegible]	金貳千六百五拾六圓參錢
內	金貳千五百參圓參拾貳錢
	金七拾八圓四拾參錢
	金七拾四圓貳拾八錢
[illegible]	金貳千七百七拾四圓[illegible]
內	金五百參拾九圓七拾八錢五厘
	[illegible]
交付金	金壹萬四千百六拾貳圓四拾七錢壹厘
內	金九百七拾四圓四拾七錢
	金四百八拾六圓
	金貳百拾五圓貳拾九錢
	金百九拾五圓
	金七百九拾貳圓參拾參錢
	金貳拾四圓參拾參錢
	金百九拾參圓參拾四錢
	金七百八拾貳圓四拾七錢五厘
	金四百貳拾六圓貳拾七錢五厘

Expenditure items listed (partly legible): 事業費 印刷費 集會費 貸品調製費 賞品費 俸給及諸給 俸給 報酬及諸給 傭人手當 旅費 通信費 電話費 備品費 … 交付金

金壹萬壹千貳百九拾壹圓五拾壹錢四厘　支會交付金
金百六拾八圓九拾六錢　地方委員部交付金
金貳千七百壹圓九拾八錢七厘　會報代徵收手數料
金四千四百七拾五圓四錢　徽章費
　内譯
　金四千四百貳圓　徽章調製費
　金七拾參圓四錢　徽章送付費
金四百五拾壹圓九拾五錢　準備費
金壹萬九千七拾六圓六拾六錢八厘　基本積立金
　内譯
　金壹萬五千貳百八拾壹圓拾六錢壹厘　基本金
　金貳千圓　樣總金
　金壹千圓　日英博覽會經費へ支出
　金七百參拾圓參拾九錢七厘　臨時部經費不足に付支出
　金六拾五圓拾壹錢　缺損金

明治四十二年度追加經費決算

金百八拾參圓九拾五錢　總收入
　内譯
　金六拾七圓　寄附金
　金百拾六圓九拾五錢　經常部豫備費より收入
金百八拾參圓九拾五錢　總支出
　内譯
　金百四拾四圓五拾錢　賞與品調製費
　金貳拾四圓參拾貳錢　郵稅
　金拾五圓拾參錢　雜費

明治四十二年度臨時部決算

金四千百六圓參拾八錢七厘　總收入
　内譯
　金參千參百參圓參拾九錢　女子蠶業講義錄代
　金四拾圓九拾錢　廣告料
　金參拾壹圓七拾錢　利子
　金七百參拾圓參拾九錢七厘　經常部基本積立金より收入
金四千百六圓參拾八錢七厘　總支出
　内譯
　金千八百貳拾參圓參拾錢五厘　印刷代
　金壹千百六拾八圓　講師報酬
　金百七拾七圓五拾錢　事務費
　金四百拾四圓七拾壹錢五厘　郵稅
　金四百九拾七圓六錢七厘　廣告費
　金貳拾五圓八拾錢　雜費

明治四十二年度基本金決算

金參萬六千六百參拾六圓四拾五錢九厘　總收入
　内譯
　金參萬壹千參百圓五拾錢壹厘　四十一年經常部積立金より繰入
　金五圓　寄附金
　金貳千七拾參圓八拾四錢　公債及預金利子
　金參千貳百五拾七圓拾壹錢八厘　四十一年度末預金及現金
金參萬六千六百參拾六圓四拾五錢九厘　總支出
　内譯
　金參萬壹千八百圓　定期預金
　金四千八百參拾六圓四拾五錢　當座預金
　金九厘　現金

明治四十二年度製絲工男女奬勵資金決算

金五百拾四圓四拾錢　總收入
　内譯
　金五百圓　寄附金
　金拾四圓四拾錢　預金利子
金五百拾四圓四拾錢　總支出
　内譯
　金五百拾四圓四拾錢　定期預金

財產目錄

金七萬貳千六百四拾貳圓拾錢　總額
　内譯
　金五萬參千五百六拾七圓六拾貳錢　基本金
　　内
　　金六百圓　五分利整理公債額面百圓六枚
　　金千圓　五分利第三回國庫債券額面五百圓貳枚
　　金五拾圓　五分利公債額面五拾圓壹枚
　　金參萬壹千八百圓　定期預金
　　金壹萬九千九百貳圓四拾五錢　當座預金
　　金貳百拾四圓　手形
　　金壹圓拾七錢　現金
　金五百拾四圓四拾錢　製絲工男女奬勵資金
　金貳千圓　經常部繰越金
　金壹萬參千九百圓八錢　家屋
　金貳千六百六拾圓　什器、書籍及電話

右之通に候也

明治四十三年二月

會頭 男爵　松平正直
理事　本多岩次郎
同 法學博士　桑田熊藏
同　鍊木喜三郎
同　吉池慶正
監事　高橋新吉
同　芳賀權四郎

右之通に相違無之候也

明治四十三年三月十日印刷發行

禁轉載

東京市神田區鍋町三丁目十八番地
編輯兼發行人　小池市松
東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷人　島連太郎
東京市神田區鍋町三丁目十八番地
發行所　大日本蠶絲會（電話本局一四七三番）
東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷所　三秀舍活版所

一部　金五錢
郵稅　金五厘